西堀榮三郎と阿武山地震観測所

竹本修三

1958（昭和 33）年 3 月 20 日に発行された「京都大学理学部卒業生名簿」がある。[3] そのなかの地球物理学教室の「職員」の欄に、阿武山地震観測所のスタッフとして、次のような名前が記載されている。

職員　阿武山地震観測所

教　授　西堀　榮三郎
助教授　三木　晴男
助教授　久保寺　章
助　手　北村　俊吉
助　手　岡野　健之助

ここで注目されるのは、阿武山地震観測所の教授として西堀榮三郎の名前があることである。西堀榮三郎（1903-1989）は、わが国の第 1 次南極観測隊の副隊長並びに越冬隊長としてよく知られている。彼の実家は、京都で縮緬問屋を手広く営んでいたが、その祖父が滋賀県東近江市湖東地区の出身の近江商人であったという縁で、東近江市湖東地区に西堀榮三郎記念「探検の殿堂」がある。そのホームページの西堀榮三郎の年表には、

「1956 年、南極観測隊副隊長に任命、京都大学理学部教授（1958 年 5 月まで）」

と書かれている。これは、先の「京都大学理学部卒業生名簿」のなかの西堀に関する記述とも矛盾しない。しかし、化学科出身の彼が、なぜ阿武山地震観測所の教授という身分で南極観測に参加したのかが疑問として残る。そこで、その経緯を調べてみた。

西堀は、1928 年に京都帝国大学理学部化学科を卒業後、同理学部講師、助教授を経て 1936 年に民間企業の東芝に移った。1939 年から 1940 年にかけて会社からアメリカ留学を命ぜられ、帰国後の 1944 年に真空管「ソラ」を発明している。また、京都生まれの西堀は、旧制京都一中（現洛北高校）・三高時代からの親友であった桑原武夫や今西錦司らとともに登山家としても活躍し、大学生の頃、旅行部（山岳部の前身）の仲間と鹿沢温泉で合宿中に四手井綱彦らの協力を得て、「雪よ　岩よ　われ等が宿り　・・・」で知られる「雪山讃歌」を作詞したことでも有名である。この歌詞の後半の、「俺たちゃ　街には住めないからに」の「・・・からに」は、京都育ちの西堀がよく使っていた京都弁であるといわれている。

第二次大戦後に西堀は、会社を辞め、コンサルティング・エンジニアのような仕事をしていたが、1951 年の秋から京都大学の生物誌研究会が企画していたネパール・ヒマラヤ学術探検に関与することになった。1952 年 1 月に西堀は、木原均とともにインドを訪問し、インド学術会議に出席したほか、ネール首相と会談し、日印合同のヒマラヤ探検隊を提案した。この提案は実らなかったが、その直後に、彼は戦後日本人として初めて単身ネパールに入国し、マナスル登山の許可を得ている。

このような西堀の幅広い活動経歴のなかで、京都大学の地球物理学教室や阿武山地震観測所との接点は見られない。それが、どのような経緯で、阿武山地震観測所の教授という身分で南極観測に参加することになったのであろうか。それを調べる糸口として、まず、「南極越冬記」から西堀自身の言葉を引用してみよう。

> 『1955 年の秋であったが、わたしは新聞紙上で、こんど日本が国際地球観測年の事業に参加して南極をやるという話を、はじめて知った。そのときには、自分がそれに関与するということは、全然想像もしていなかった。（中略）
>
> ところが、とつぜん、学術会議から呼出しが来た。南極観測について、わたしの意見を求める、というものである。（中略）そのときにはまだ、この問題に飛び込んで実際に自分でやるというということは、まるで考えなかった。

[3] 「京都大学理学部卒業生名簿」は、その後、1964（昭和 39）年 11 月 30 日にも発行されている。

ところが、その後、事態は思わぬ方向に動いていった。わたしはいつのまにか、渦のなかにまきこまれてしまった。』

これを読むと、西堀自身が最初から南極観測に関与したいと望んでいたわけではなく、自ら積極的に働きかけをしたこともなさそうである。しかし、本人の意思とは関係なく、時代が彼を必要としたのであろう。結果として西堀は、わが国の南極観測の歴史に大きな足跡を残すことになった。

1955 年に日本学術会議でわが国初の組織的な南極地域観測事業を行うという方針が決定されたとき、1910 年代の白瀬隊による南極探検の先例はあったものの、南極観測にはどのような危険が待ち構えているか、ほとんどわかっていなかった。その状況のもとで、学術会議の南極特別委員会は、観測隊の越冬隊長候補として、厳冬期の登山経験が豊富で、組織力、統率力とともに活動力があり、しかも比較的自由に動ける立場にいた西堀が最適と考えたのであろう。そこで、西堀をしかるべき国家公務員のポストにつけて、南極に派遣するための環境づくりが学術会議を中心にして、西堀の知らないところですすめられたと思われる。その背景となる南極地域観測事業の発足当時の事情を文部省の「南極六年史」に基づいて簡単に述べておく。

わが国の南極地域観測事業は、国際地球観測年（IGY）への参加を契機として開始されたものである。IGY は、地球上で起きるさまざまな現象を検証するため、世界の国々が協力して同時期に地球を調べようという試みで、1957 年 7 月から 1958 年 12 月までの 18 ヶ月間にわたり、64 カ国が参加して行われた大規模な国際的学術調査であった。この IGY の国内委員会の委員長が京都大学理学部教授（地球物理学教室）の長谷川万吉であり、日本の IGY 事業を成功させた長谷川の功績は大きい。この経緯は、永井宏と佐野康治による「長谷川万吉と地球電磁気学」に詳しく述べられている。

1952（昭和 27）年 10 月にアムステルダムで開催された国際科学会議（International Council for Science :ICSU）の総会において 1957 年から 1958 年に第 3 回極年を実施することが提唱され、加盟各国機関に参加要請が行われたのを受けて、学術会議はただちに第 3 回極年研究連絡委員会（後に IGY 研究連絡委員会）を設置した。委員長は長谷川万吉、総幹事は東京大学理学部教授（地球物理学教室）の永田武であった。その後、ICSU の国際地球観測年特別委員会（CSAGI）のもとに「南極会議」が設けられ、その第 1 回会議が 1955 年 7 月にパリで開催され、日本にも南極地域の観測を行うよう勧告がなされた。そのときまでに、アルゼンチン、オーストラリア、ベルギー、チリ、フランス、ニュージーランド、ノルウェー、イギリス、アメリカとソ連が南極観測への参加の意思を表明していた。

学術会議の茅誠司会長は、この計画を聞いて、いち早く賛同し、1955 年 7 月中旬から政府首脳と協議しつつ、学術会議のなかで検討を重ねた。そして、同年 9 月にブリュッセルで開催された第 2 回「南極会議」に長谷川万吉、永田武を含む 6 名が日本代表として学術会議から派遣され、日本の南極観測への参加の意思を表明し、ここで日本の参加が承認された。参加を表明した 11 カ国のなかでは、日本は決定が最後になったため、割り当てられた観測地域の条件は、あまりよくなかった。残された地域のなかから、日本は、プリンスハラルド海岸一帯を基地建設の候補地として選択した。

これを受けて、1955 年 10 月には、科学技術行政協議会で南極観測実施統合本部を文部省に設けることが決まり、その直後の学術会議第 20 回総会で、南極特別委員会の設置が議決された。この委員会の委員長は茅誠司であったが、長谷川万吉は運営委員としてこの会議を実質的に主導した。また、この委員会には日本山岳会からの槇有恒や今西錦司などのほか、木原均も顧問として就任していた。11 月 4 日には、南極観測に参加することが正式に閣議決定され、文部省内には「南極地域観測統合推進本部」が設置された。第 1 回南極本部総会は 11 月 10 日に開かれ、本部長である松村謙三文部大臣が、本部設置の経緯や南極観測の意義などを挨拶のなかで述べたのち、会議の運営方針や予算要求の枠組みが決定された。そして、12 月 23 日の第 2 回南極本部総会で、隊長には東京大学理学部教授の永田武、船長には海上保安官の松本満次が決まった。さらに、翌年、1956（昭和 31）年 3 月 12 日の本部幹事会で、副隊長に西堀榮三郎が学術会議からの推薦により決定された。以上が記録から辿れるわが国の南極地域観測事業の発足までの簡単な経緯である。

わが国初の南極観測を実施するに当たり、学術会議南極特別委員会の中心メンバーである茅誠司、

長谷川万吉及び永田武の間では、今西錦司や木原均などの顧問の意見も参考にしたうえで、隊長として永田武､副隊長兼越冬隊長として西堀榮三郎の名前は比較的早くから浮かんでいたと思われる。ただ、これを政府機関の南極本部に認めてもらう場合に、東大教授である永田武は問題ないが、国家公務員でない西堀榮三郎の場合には、何らかの対策を講じる必要があったのであろう。この問題を解決する道を開いたのが長谷川万吉であった。1955（昭和 30）年 11 月から 1956（昭和 31）年 3 月までの短い間に西堀榮三郎の京大理学部教授への就任が決まっている。

この時期の京大総長は瀧川幸辰（ゆきとき)、また、理学部長は芦田譲治であった。この二人の了解がないと、理学部教授人事はすすまない。長谷川万吉は、西堀を京大教授として引き受けるべく、瀧川幸辰と芦田譲治に働きかけをしたと考えられる。長谷川万吉は芦田譲治の 3 代前の理学部長であったから、瀧川や芦田と気安く話ができる立場にあった。また、当時の学術会議第 4 部（理学）の会員（第 3 期：昭和 29 年 1 月 20 日～昭和 32 年 1 月 19 日）には、京都大学理学部から、長谷川万吉のほかに石橋雅義（化学)、宮地傳三郎（動物学）が選出されていた。石橋は 1953～1956 年の理学部長、宮地は 1961～1962 年の理学部長である。この二人も西堀の京大理学部教授就任に側面から協力したかも知れない。

刑法学者の瀧川幸辰は、1933（昭和 8）年の「瀧川事件」のあと、京都帝大を離れていたが、戦後京大に戻り、1953（昭和 28）年 12 月 11 日から 1957（昭和 32）年 12 月 15 日まで京大総長を務めた。伊藤孝夫の著書「瀧川幸辰」によれば、瀧川は、戦前には左翼学者の烙印を押されて大学を追われ、戦後の学生運動からは保守反動と攻撃されたが、本人は、ダンテの「汝の道を歩め、そして人々をして語るにまかせよ」を座右の銘として､「自らを顧みてその出処進退に恥ずるものは何もない」と言いきっていたそうである。

また、芦田譲治は温厚な植物学者で、私が 1961（昭和 36）年に京大に入学した頃の学生部長であった。当時は学生デモが盛んで、河原町通りや四条通りをデモ行進していると、その横の歩道を心配そうに付いて来る芦田学生部長の姿をよく見かけた。そのとき、われわれ学生は､「芦田先生がいるところでは、無茶はできないな」と言い合ったものである。瀧川も芦田も、筋をとおして話をすれば、協力を惜しまなかったであろう。

さて、通常の理学部教授人事では、決定するまでに 1 年以上の期間がかかる。つまり、学部自治のもとで、教室推薦の教授候補を決めるまでに半年以上かかり、この教室推薦の候補を学部にもち出して 3 回の教授会の議を経なければならない。その 1 回目は教授任用の申し出、2 回目は候補者受理、そして 3 回目に投票である。そこで決まると、全学の評議会に報告し、総長が辞令を交付するというのが現在の手続きであるが、その当時は、評議会の承認後、それを文部省に上申し、任命権者である文部大臣が辞令を交付するという手続きを経ていた。

西堀榮三郎を短期間で京都大学理学部の教授ポストに就かせるための具体案を考えたのは、長谷川万吉の 4 年後輩である佐々憲三理学部教授であったと考えられる。佐々は、1955（昭和 32）年 4 月から理学部選出の評議員、1957（昭和 32）年 4 月からは、芦田譲治のあとを継いで 2 年間、理学部長を務めている。

佐々は、西堀を教室所属の教授でなく、阿武山地震観測所の教授とすることで、教室推薦の手続きを省略した。つまり、教授ポストのない阿武山地震観測所には、所長である佐々のほか、槙山次郎（地質鉱物学)、友近普（物理学)、高橋勲（物理学)、宮本正太郎（宇宙物理学)、西村英一（地球物理学）が兼任教授として観測所の運営に関与していた。この兼任教授の了解を得るだけで、理学部教授会に阿武山地震観測所の教授任用の申し出ができる。また、観測所の教授であれば、授業担当等の義務を割り振らなくてもすむ。佐々は、こういった事情をうまく利用して、西堀榮三郎の京大理学部教授への任用手続きを、約 3 ヶ月でやってのけた。もちろん、事情を承知している京大本部や文部省も協力したであろう。その結果、西堀榮三郎は、1956（昭和 31）年 3 月 16 日付で京大理学部教授に任用されている。

しかし、当の西堀榮三郎にしてみれば、阿武山地震観測所の教授になったという意識はほとんどなかったと思われる。1957（昭和 32）年 3 月末に阿武山地震観測所に事務員として雇用され、以後 1998（平成 10）年 3 月まで 41 年間にわたって阿武山に勤務された伊藤勝祥氏に聞いてみたところ､「西堀榮三郎さんに会ったことはなく､阿武山観測所に西堀さんの持ち物も置かれてなかった」

という話であった。

一方、佐々憲三もそれで何ら不満はなかったはずである。その理由は、佐々はそれまでに阿武山地震観測所に教授ポストを付けたいと思い、いろいろ努力をしていたがうまくいかず、長谷川万吉から南極観測に絡んで西堀榮三郎の処遇を相談されたとき、この機会に阿武山地震観測所に教授ポストを付けてもらい、それを南極観測に参加している期間だけ西堀に提供し、その後は本来の使い方をすればよいと考えたのであろう。事実、西堀榮三郎が 1958（昭和 33）年 3 月に南極から帰国して間もなく、同年 4 月 22 日に京大教授の職を辞して日本原子力研究所理事に転出すると、佐々は、そのポスト使って、阿武山地震観測所の助教授であった三木晴男を 1959（昭和 34）年に教授に昇任させている。

佐々憲三は、1963（昭和 38）年 5 月に停年退官しているが、その約 1 年前に阿蘇火山研究施設に教授ポストを確保して、自分がそのポストに移り、それまで彼が在籍していた地球物理学教室応用地球物理学講座の教授の席は、助教授であった小澤泉夫に譲っている。佐々が停年退官後、阿蘇火山研究施設の教授ポストは、やはり佐々の弟子であった久保寺章が継いでいる。これより先に、佐々憲三は、工学部土木学科の石原藤次郎、同建築学科の棚橋諒と協力して、1951（昭和 26）年に京都大学附属防災研究所を立ち上げているが、佐々の京大在職中に、弟子のなかから吉川宗治（地震動部門）と山口真一（地すべり部門）が防災研究所の教授になっている。さらに佐々が退職後に防災研究所の教授になった弟子に、高田理夫（地震予知計測部門）、島通保（地すべり部門）、吉川圭三（桜島火山観測所）らがいる。このように、京都大学における固体地球物理学研究の分野で、佐々憲三の存在はきわめて大きかった。

ところで、昭和 33 年 3 月 28 日発行の「京都大学理学部卒業生名簿」には、もう 1 つおもしろい事実が記載されている。同じ地球物理学教室のページの大学院（修士終了）のなかに北村泰一（昭和 31 年修士終了）の名前があり、その勤務先は、南極観測隊員となっている。「南極六年史」には、北村の身分として、京都大学大学院学生（理学部）と記載されている。長谷川万吉の研究室で学んだ北村泰一は、第一次及び第三次越冬隊員として参加し、オーロラと宇宙線の観測を担当した。この北村は、「南極越冬記」のなかでは、第一次越冬隊員の犬係としてその名前がしばしば出てきて、映画「南極物語」で渡瀬恒彦が演じた京大の若手研究者の“越智隊員”は、北村がモデルであったと言われている。

後年、私の研究室の女子学生の院生を南極に派遣するとき、南極観測の越冬隊員は、国家公務員でないといけないと言われた。そこで、助手のポストを借りてきて、彼女を休学させ、助手にして南極に送り出したという経験があった。これを思い出して、第一次南極観測隊の時代にはそういう縛りがなく、院生のままでも参加できたのかと思い、極地研究所の神沼克伊名誉教授に調べていただいた。その結果、南極に派遣して手当を出すためには、やはり国家公務員であることが前提で、大学院学生は、「文部省の技術員」に採用されて南極観測に参加していたそうである。やはりいろいろ面倒な手続きが必要であったようだ。

西堀榮三郎は、「南極越冬記」のなかで次のように述べている。

> 『政府の事業としてやるということは、よい点もあるけれど、同時にいろいろな制約をうけるものだ。民間の団体なら、かなり自由に、効果的にやれるものが、政府なるがゆえに、メンツや責任の問題もあり、官庁のきまりもあり、なかなかむつかしくなる。』

自由人の西堀にしてみれば、いろいろ窮屈な思いをしたことがあったのだろう。

いずれにしてもわが国の南極観測の側面史の一つを知ることができた。

(文献)

伊藤孝夫：瀧川幸辰ー汝の道を歩め、ミネルヴァ書房, (2003), pp.327.
永井宏・佐野康治：長谷川万吉と地球電磁気学, 開成出版, (2002), pp.126.
西堀榮三郎：南極越冬記, 岩波新書(青版), 岩波書店, (1958), pp. 270.
西堀榮三郎記念「探検の殿堂」：西堀榮三郎年表、http://tanken-n.com/nishibori.html
文部省：南極六年史　（南極地域観測事業報告書）, (1963), pp.270.